

SHAMAAL E AFGHANISTAN

シャマーレ・アフガニスタン
--アフガニスタンの風--

AFGHAN MUSIC PARTY AT PESHAWAR 2001
AML JAN & HIS MUSIC FAMILY

PRODUCED BY
OHTSUKI HIDEAKI

ENGINEERED BY
HARADA RYOTARO

PHOTOGRAPH BY
DE JYOJI

ALBUM DESIGN BY
MATSUMOTO TAKASHI

COORDINATOR
MATSUMOTO SHIN
ATTALLAH ROOHULLAH

SPECIAL THANKS TO
KAMEL
M CHAEL
YOSHIDA HIROSHI
MAKINO BUNPEI
YAMAGUCHI RYO
TAKEUCHI SHINOBU

MANUFACTURED AND DISTRIBUTED BY
LOTUS MUSIC
6606 HATA-TOWN,
H GASHI CH KUMA,
NGANO, 390-1401,
JAPAN

1. MULAA MAMA JAN
AML JAN ---DUTAR

2. DA ZMUNG ZEBWA WATAN
AML JAN ---REBAB
SAMAN GUL ---TABRA
ZAR WALI ---VOCAL HARMONUM
NURAHMAN ---VOCAL
SHOKAT WALI ---REBAB
GHULAM SAHI ---ZERBAGALI

3. POR KHUD NAMA YE KARGA YE CH DA CHUN MA BASH
AML JAN ---REBAB
SAMAN GUL ---TABRA
SHA RASUL ---VOCAL HARMONUM

4. MAQSADE MA AZ DDANE SHOMA
AML JAN ---REBAB
SAMAN GUL ---TABRA
ZAR WALI ---HARMONUM
NURAHMAN ---VOCAL
SHOKAT WALI ---REBAB
GHULAM SAHI ---ZERBAGALI

5. OFF KE DE SHAGRAM SHOMA
AML JAN ---REBAB
SAMAN GUL ---TABRA
ZAR WALI ---VOCAL HARMONUM
SHOKAT WALI ---REBAB
GHULAM SAHI ---ZERBAGALI

6. TRADITIONAL SONG
AML JAN ---REBAB
SAMAN GUL ---TABRA
ZAR WALI ---VOCAL HARMONUM
SHOKAT WALI ---REBAB
GHULAM SAHI ---ZERBAGALI

今回のCDが緊急発売ということになったため、歌詞の意味など不明な点も多く、曲名を調べるだけでもずいぶん難航してしまっただけです。とりえず発売日を目前にしていま分かっていることのみ記してお許しを願いたい。

1. Mulaa Mama Jan

この曲はマザリシャリフの有名な曲で、タイトルの意味は「赤い花のまつり」。本来はアフガン・ダリ語のボーカル・ソングとして知られており、

チュールリップのお花畑をみてごらん
My Sweet Heart!
悲しいことがあるのなら
泣いたままでいいから
マザリシャリフに行こう
そうすればそこに祀られているアリのように
強い心になれるでしょう
私には神がいるし
預言者ムハンマドもいるから
なにも心配はない……

というような歌詞が歌われ、アフガン・ミュージックを代表する曲のひとつだということができると思います。アフガンのミュージシャン達から聴くところによると、ソ連が侵略してくる20数年前までは、マザリシャリフでは毎年1回アフガン国中からミュージシャンと観客達が集まり、40日間にわたり延々と続く音楽の祭典があったという。アフガニスタンに平和が戻ったならば、40日間とはいわなくても、ぜひ復活を望むものです。その祭りのタイトルが「ムラー・ママ・ジャン 赤い花の祭り」です。

2. Da Zmung Zebra Watan

アフガニスタンの民族人口比率では40%近くを占めるのがパシュトゥーン人。そのパシュトゥーン人の詩人マラング・ジャン。「マラング・ジャン作詞による歌をうたいます」というイントロに続き、2人のボーカリストがアフガンへ寄せる想いを気合いを込めて歌い上げるこの曲は、「なんて美しい祖国(アフガニスタン)」という意味あいです。なおアフガニスタンとはパシュトゥーン語で「パシュトゥーン人の国」という意味だそうです。

3曲目以降については、3曲目はさまざまな民族の言葉による即興の歌で、4曲目はアフガン・ダリ語、5曲目はパシュトゥーン語、6曲目はヘラートの古典的な曲で、ヘラート出身の人なら誰でも知っているような名曲だそうです。

ほとんどの曲がダブルときにはトリプル・ミーニングで、恋の歌であり恋人への想いを込めるとともに、一方では「インシャラー」つまり神のおぼし召し、神への愛を歌い上げられています。

また、1つの曲にタイトルというものがあまり無く、ここにあげた曲名も歌の冒頭部分であったり、曲名が不明なものもあります。なお収録したものは、アフガニスタンのそれぞれの民族で歌われている名曲で、アフガニスタン音楽の代表作といってもよいものだと思います。

収録は2001年2月28日～3月12日にかけて、パキスタンのベシャワール市内のホテルに特設のスタジオを設置して(といっても粗末なものです)おこなわれました。タリバンによる迫害を逃れて難民キャンプにいられたミュージシャン達が連絡を取り合っただけで、10数年ぶりという録音と撮影がおこなわれました。

ミュージシャン達の中心は53歳のAmil Jan(Amir Janが本名)で、彼はヘラート出身のアフガン難民で17～18年前にパキスタンへ逃れてきたとのこと。Wali兄弟はJanの甥で難民キャンプ生まれ、他のミュージシャン達はこの数年間にアフガンから脱出してきたとのこと。彼らはふだんは、ミュージックスクールで教えた、結婚式・お金持ちのパーティー・大使館に呼ばれて演奏するなどの生活で、金銭的に苦しい状況に置かれています。

「アフガニスタンの人々のいのちを救おう・緊急キャンペーン」として、2001年1月から1ヶ月間の予定で緊急支援を行ってまいりましたが、12月下旬になってもカンパが寄せられ、結局1月31日をメイトとして、難民への緊急支援活動を終了いたしました。150万円をはるかに超えるカンパが集まり、「ベシャワールの会」「国境なき医師団」の2NGOへ半分づつ送金しました。多くの方々からのカンパ、ありがとうございました。

市民一人ひとりが驚かされるスタイルでの支援活動はできないだろうかと、ということをお考えながらの行動にたっただけですが、現地の人たちは自分たちのための支援NGOだと勘違いして、大呆れだったようですよ。前編した17の学校の再建と先生たちの支援をすることにしました。地雷除去・医療・食料など様々な支援が必要としてはいたのですが、ささやかな私たちのグループが責任を持って、ということに現地の人々と話をした結果、彼らももっとも求めていたのが「教育」だったわけですね。

空爆のさなか、チケットもどきも取れない中で、とにかくベシャワールまで行き、脱出して行く難民に直接できる支援を試みよう、ということで、メンバーの月山さん(波田町)がなんと12月17日にパキスタンに到着。

わずかの期間に状況は大きく変化しており、タリバンの崩壊、暫定政権協議会の成立、そしてベシャワール近郊の難民はアフガンの帰郷を目指し始めており、難民キャンプへの支援より、「帰るふるさとの復興への支援を」求められ、誇張抜きに、命懸けの思いでアフガニスタンとの国境カバル峠を越え、カバルに着いたのが2月2日。

実は、昨年3月にベシャワールで録音したアフガン民族音楽のCDを1月に緊急作製し、(ここ10数年間、アフガン音楽に目を向ける者は無く、またタリバン政権下でミュージシャンなどが迫害を受け、新しいCDなどはないということ)その収益で難民支援を、と緊急キャンペーンの一部として「シャマーレ・アフガニスタン」プロジェクト(アフガニスタンの風、という意味)を立ち上げていました。

実は、昨年3月にベシャワールで録音したアフガン民族音楽のCDを1月に緊急作製し、(ここ10数年間、アフガン音楽に目を向ける者は無く、またタリバン政権下でミュージシャンなどが迫害を受け、新しいCDなどはないということ)その収益で難民支援を、と緊急キャンペーンの一部として「シャマーレ・アフガニスタン」プロジェクト(アフガニスタンの風、という意味)を立ち上げていました。

今回の月山さんの「パキスタン、そしてアフガン現地へ」という行動は、その一環として位置づけ、当初予定していた11月中の緊急の食料医療援助を発展させた行動として考えていました。

また地の海外のNGOが到着していなかったカバルで今後の支援について様々な現地のNGOと話し合い、カバルから北に地雷帯の中を車で1時間ほど行ったシャマール地方で、(偶然私たちのグループと同じ名前の地方があり、現地の人たちは自分たちのための支援NGOだと勘違いして、大呆れだったようですよ)前編した17の学校の再建と先生たちの支援をすることにしました。地雷除去・医療・食料など様々な支援が必要としてはいたのですが、ささやかな私たちのグループが責任を持って、ということに現地の人々と話をした結果、彼らももっとも求めていたのが「教育」だったわけですね。

遠くに雪をいたく山々にはアルプスのようで、今は地雷帯だらけになっているかつてのドクドク畑が見違え限り広がり「ここは国境じゃないか!」「信州からアフガンへ、と聞いて着いた地がまるで信州だった」と帰国後にも月山さんは語っています。

「教育」に期待をかける現地の人たちの思いは強く、建物は日干し煉瓦で自分たちでもなんとかが建てられる。机や椅子、黒板、ノートや鉛筆などの援助が必要。また海外などに難民として脱出している先生たちを呼び戻したいが、政府から給料が出ず彼らが生活できないので、そのサポートをお願いしたい、ということでした。シャマール地方の中心の町である Panam Charikar市の唯一残っていた校長先生であり街の責任者の一人である A Samad さんは、自分が責任を持って窓口になる、ということで3月21日、アフガニスタンの正月をめぐり、とりあえず3枚を再建しよう、ということになりました。

このCDの収益は学校再建と先生たちのサポートとなります。シャマーレ・アフガニスタンプロジェクト(アフガニスタンの風、という意味)を立ち上げていました。郵便口座: 00560-3-73975 [シャマーレ・アフガニスタン] http://ngou.net/afghanokaze/